

NEWS LETTER

VOL. 11
JAN 2020

HRC-GH

センター主催の各種ワークショップやプレゼンテーション、成功裏に終了



12月はセンターにとって活発な活動の月となりました。まず12月7日、8日に三重県津市で開催された第34回日本国際保健医療学会学術集会にブースを設け、国際保健に関心のある学会員等の方々に国際機関で活動する意義やセンターの活動について説明する機会といたしました。様々な方々にブースにご来場いただき、センタースタッフから個別的に情報を差し上げることができました。

次に12月14日福岡市で開催された第4回国際臨床医学会学術集会において学会員及び市民の方々を対象とするオープンセミナーを開催いたしました。まずセンター長から国際機関に邦人職員を増やす意義についての説明があり、次いで、WHO西太平洋地域事務局エリック・ダグノン人事課長からWHOの活動と採用プロセスについての詳しい説明がありました。その後世界銀行東京事務所の平井智子上級広報担当官に、選考に打ち勝つ準備について説明を受けました。最後に、国際保健政策人材に求められる資質に関する厚生労働省研究班の研究成果を国立保健医療科学院の大澤絵里主任研究官から発表して頂きました。国際臨床医学会はインバウンド/アウトバウンド医療を中心とする医療機関関係者と医療通訳関係の方々が中心となって発足させた学会です。ご参集の方々は、従来の国際保健関係者とは違った方々で、国際機関に邦人職員を増やすことの意義を力説いたしました。

12月15日には、今年で4回目になります「国連/国際機関へ行こう - 日本人専門職の方へのグローバルヘルス・キャリア・ディベロップメント・ワークショップ」が東京と大阪の2会場で開催されました。今年もWHO西太平洋地域事務局のご支援を頂き、ジェフリー・コプザ管理・財務部長、エリック・ダグノン人事課長、アナ・ワドワニ渉外担当官の3名をリソース・パーソンとしてお招きしました。午前中はWHOスタッフによる概括的な説明が行われ、午後は日本人が不得意とする履歴書の書き方と、筆記試験の受け方、面接の受け方についての集中的な演習を「アドバンスコース」として行いました。これらのセッションの合間には充分時間をとったネットワーキングの場が持たれ、リソース・パーソンと、また、受講者同士で活発な意見交換が行われたことも今年の特徴となりました。



重要情報

WHO本部は、テドロス事務局長(2017年7月就任:任期5年)の下、大きな組織改編が行われていましたが、2019年末に終了し、2020年は新体制での新規採用が活発化するとの情報があります。職員数過少国の日本にとっては良いチャンスですので、人材登録・検索システムよりキャリアに合った公募情報を迅速に入手して、奮ってご応募ください。ニュースレター及びメーリングリストでも最新の情報を発信してまいります。

■ 人材登録のお願い

12月現在、約520名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっています。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲載しています。今後、WHOにおける募集や各種お知らせが続きますので、未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったのがキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々がご帰国された際に熟練したインタビュアーにお願いして、キャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させていただくこととしました。

第1回は、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA) 医療局長の清田明宏氏とWHO 西太平洋地域事務局 顧みられない熱帯病(NTD)担当官の矢島綾氏です。

インタビュアー 清水真理子

第1回



国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) 医療局長 清田明宏 [せいた あきひろ]

1961年福岡県生まれ。1985年高知医科大学(現・高知大学医学部)卒業。医師。1986年米横須賀基地病院インターン。1987年～(公財)結核予防会・結核研究所国際保健部医員。1990年～JICA イエメン結核対策プロジェクト医員。1995年～WHO・東地中海地域事務局結核対策担当官P4(エジプト・アレキサンドリア)。2000年～WHO・東地中海地域事務局 結核対策地域アドバイザーP5(エジプト・カイロ)2003年～04年ハーバード大学公衆衛生大学院・武見国際保健プログラム・リサーチフェロー。2006年～WHO・東地中海地域事務局結核・エイズ・マラリア コーディネーターP6(エジプト・カイロ)。2010年～国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA、通称ウルフ)保健局長D2ヨルダン・アンマン在住。2015年第18回秩父宮妃記念結核予防国際協力功労賞を受賞。

私が医学部に進学した1980年代初めは、カンボジアのボートピープル、難民問題が盛んに報道され、犬養道子さんの『人間の大地』を読み、将来こういう人を助ける仕事に就きたいと思うようになりました。それでも最初は具体的にどうすればいいのか全くわからず、AMDAの学生団体に活動し、諸先輩の話や聞くうちに、将来は公衆衛生をやろう、国際保健の分野で医療にアクセスできない人びとを助けられるような仕組みをつくりたいと考えるようになりました。



世界保健機関 (WHO) 西太平洋地域事務局 テクニカルオフィサー 矢島綾 [やじま あや]

1977年東京生まれ。ロンドン大学卒業後、タイのアジア工科大学院で環境衛生学修士号取得。東京大学農学生命科学研究科にてベトナムの寄生虫伝播対策で博士号取得。2009年よりWHO本部NTD伝播対策にJPOとして2年半従事し、2012年に正規職員として採用。2015年からWHO西太平洋地域事務所(マニラ)にて現職(NTD対策専門官)NTD制圧・対策に向け加盟国保健省の政策立案・実施・ドナー調整、資金調達等を支援。マニラにベトナム人の夫と娘(6歳)と在住。

父の仕事は海外出張が多く、私も小さい時から留学したい、いつか海外で仕事をしたいという気持ちを持っていました。大学1年の時、父がイギリスに転勤、将来外国で仕事をするのならこのまま日本の大学を卒業するより、外国の大学で学ぶ方がいいと考え、思い切って退学、ロンドンに行きました。

イギリスの大学入試は英語と高校時代の成績で決まり、ロンドン大学環境科学科に合格、寮生活が始まりました。日本では

卒業後インターンとして内科・外科・小児科・産婦人科すべてを回れる在日米軍横須賀基地病院で研修、これは非常にいい経験でした。当時は平和な時代でそんなに忙しくなく、アメリカ人は親身になって指導してくれ、英語の勉強にもなりました。

1年の研修が終わり、さてどうするか、公衆衛生の大学院で修士号をとることを考え資料を取り寄せましたが、受験資格に実務経験が必要。それで自分の経歴を手書きでA4用紙にまとめ、コピーして、全国、特に関東にある100以上の研究所に採用願いを送りました。返事をいただいたのはわずか2か所、1つは「コピーした経歴書を送るとは礼を欠いている」とお叱りの手紙、そしてもう一通が清瀬の結核研究所からで「空席があるから面接をしたい」無事採用され、それが結核との出会いでした。

当時結核研究所には国際協力部ができたばかりで、国内の結核患者さんの数は減ってきていました。附属病院で呼吸器内科の患者さんを診察し、3年目29歳の時、JICAのイエメン結核対策プロジェクトに参加しました。当時のイエメンは統一直後で治安もよく保健省内に日本がつくった結核研究所のオフィスで2年半、結核対策に取り組みました。(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/file01 でお読みいただけます。)

英語は得意なほうでしたが、やはり最初は英語でとても苦労しました。この時の苦労が今に生きています。ロンドン大学の学生は全員、授業が終われば図書館に直行、夜まで課題文献を読みアサインメントをこなし授業ではどんどん発言します。私の場合英語力でハンディがありますから、人の3倍4倍努力しなきゃいけないと常に自分に言い聞かせ4年間猛勉強しました。理数科系はもともと得意でしたが、ほかの科目も英語がわかってくるとだんだん成績は上がってきました。

環境科学科のキャンパスは、バングラデシュ・パキスタンなど南アジアの移民系の人が多い地域にあり、大学生活でも多国籍の中に放り込まれました。フィールド・トリップの部屋割りや印象的なことがありました。同室のメンバーは、宗教がばらばら、シーク教徒、敬虔なムスリム、カソリック、私は仏教で夜いろいろ話しているときに宗教の議論になり、もちろん正解はなく、それぞれがもつ宗教・歴史的バックグラウンドの多様性と相互理解の難しさに気づきました。(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/file02 でお読みいただけます。)